

田園調布

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

能島六郎は五十年余り鍛冶職人として生きてきた老人である。十二歳の吉川浩太は学年一番の成績を上げる少年であるが、鍛冶職のすばらしさに惹かれて親方に弟子入りしたいと言ってきた。

十二月になったばかりの夕暮れ、須崎は六郎の鍛冶場に訪ねてくると、仕事場をぐるりと見回して懐かしそうに言った。「いや懐かしいですね。私、生まれ育ったのが出雲の佐多町という山の中でしてね。そこに山村の鍛冶屋が一軒あって、職人さんが一人で毎日金槌を打っていたんです。私、子供の時分、その仕事を見るのが好きで、一日中眺めていました。山で働く人には必要ないろんな道具をこしらえていたんですよ」

「ああ、知っておる。わしの兄弟弟子の一人が山鍛冶職人になったからの。あんたは浩太の担任の先生ですか。あんたがわしの所に来なさった用件はわかっています」

「いや能島さん、違（ちが)うんです。私は浩太君に鍛冶屋になる夢を捨てるとは一度も言っていない。鍛冶屋さんはいい仕事だと言いました。鍛冶屋は人間が最初につけた職業のひとつだと教えたんです。浩太君が鍛冶屋になりたいと言出したのは私のせいでもあるんです……ですから私の話を聞いて貰（もら)いたいんです。浩太君は能島さんの話なら耳を傾けてくれます。あなたのことを本当に尊敬しているんです」

須崎という教師の話には説得力があった。

その翌日、須崎に連れられて浩太の母が神妙な顔をしてあらわれ、先日（しんみよう）の非礼を詫（わ)び、息子（むすこ）を説得（むすこ）して欲しいと頼（たの）みにきた。

「ともかく話してみよう」

六郎は二人に約束した。

承諾はしたものの、口下手な六郎の説得をあの手伝い無垢な浩太が聞き入れてくれるとは思えなかった。進学した方がおまえのためだと話せば話すほど浩太は自分に裏切られたと思うに違いない。

六郎は考えた。妙案なぞ浮かぶはずはなかった。考えた末、六郎が出した答えは彼がかつて少年の時、親方が彼に鍛冶職人がいかに素晴らしい職業かを教えてくれた、あの山径に二人で出かけ、親方が言ったことと同じ話をしてみようということだった。それは説得とはまったく逆の話なのだが、六郎は自分ができる唯一の方法だと思った。

昼食を終えて二人は岩の上で少し昼寝をした。

六郎は眠れなかった。胸元で浩太の寝息が聞こえた。

六郎の胸の上に浩太のちいさな指がかかっている。いつかこの指が大人の男の指になるのだろうと思った。その時は自分はこの世にいない。浩太がどんな大人になるか見てみたい気がする。六郎は独りで生きてきたことを少し後悔した。

——いや、そのかわりにこの子に逢えた。

親方の言葉がまた聞こえてきた。

『玉鋼と同じもんがおまえの身体の中にもある。玉鋼のようにいろんなもんが集まって一人前になるもんじゃ。鍛冶の仕事には何ひとつ無駄なものはない。とにかく丁寧に仕事をやっていけ』

親方の言葉が耳の底に響いた。

玉鋼は鋼の最上のものである。ちいさな砂鉄をひとつひとつ集めて玉鋼は生まれる。親方はちいさなものをおろそ

かにせずひとつひとつ集めたものが一番強いということを少年の六郎に言って聞かせた。その時は親方の話の意味がよくわからなかった。それが十年、二十年、三十年と続けて行くうちに理解できるようになった。一日一日も砂鉄のようなものだったのかもしれない……。

浩太が目を覚ました。

「浩太、鋼は何からできるか知つとるや」

「鉄鉱石」

「そうじゃ。他には」

浩太が首をかしげた。

「ならそれを見せてやろう。靴を脱いで裸足になれ」

六郎は浩太を連れて滝壺の脇の流れがゆるやかな水に膝まで入り、底の砂を両手で掬い上げた。そうして両手を器のようにして砂を洗い出した。浩太は六郎の大きな手の中の砂をのぞきこんでいる。やがて六郎の手の中にきらきらと光る粒が残った。六郎はその光る粒を指先につまんで浩太に見せた。

「これが砂鉄じゃ。この砂鉄を集めて火の中に入れてやると鋼ができる」

「ぼくにも見つけられますか」

「ああできるとも。やってみろ」

浩太はズボンが濡れるのもかわらず水の中から砂を掬い上げると両手の中で洗うようにした。浩太のちいさな手に砂鉄が数粒残った。

「あった、あった。砂鉄があった」

浩太が嬉しうに声を上げ、六郎を見返した。

「それは真砂鉄※まざこと言う一等等な砂鉄じゃ。このあたりにしかない。※かなやさんがこの土地に下さったもんじゃ。その砂鉄をあつめて、これだけの玉鋼たまがねができる」

六郎は先刻まで二人が座すわっていた大岩を指さし、両手で鋼の大きさを教えた。

「あの岩ほど集めて、それだけの鋼しか取れないんですか」

「そうじゃ。そのかわり鋼きたを鍛えて刀に仕上げればどんなものより強い刀ができる。どんなに強い刀も、この砂鉄の一粒が生んどう」

「なら砂鉄が一番大事なものですな」

「そうじゃ。砂鉄はひとつひとつはちいさいが集まれば大きな力になる。この砂鉄と同じもんが、浩太の身体の中にある」

「ぼくの身体の中に……」

「どんなに大変そうに見えるもんでも、今はすぐにできんでもひとつひとつ丁寧に集めていけばいつか必ずできるようになる。わしの親方がそう言うた」

「ぼくも、ぼくの親方のようにいつかなれるんですね」

「……」

⑤ 六郎は浩太の言葉に口ごもった。

「浩太、わしだけがおまえの親方ではない」

「どうしてですか。ぼくの親方はあなただけです。親方だけです」

浩太の顔が半べそをかきそうになっていた。六郎は浩太の頭を撫なでた。

二人は滝たきを離はなれると、青煙けいりの中腹まで登った。そこから中国山地の美しい眺望ちやうぼうをひとしきり眺めて下山した。

登山口のバス停で二人は並んでバスを待った。六郎はバスのくる方角を見ていた。

「親方、今日はありがとうございます」

浩太がぼつりと言ってお辞儀じぎをした。

「どうしたんじゃ急に、礼なぞ水臭みずくさい」

六郎はうつむいている浩太を見て、思い出したようにポケットの中を探さがった。そうしてちいさな石を浩太に差し出した。

「滝のそばで拾うた。みやげに持って行け」

それは鉄鉱石だった。浩太は石をじつと見ていた。

「いつかおまえが大きゅうなったら、この山をもう一度登るとええ。そんな時は誰だれかを連れて行って、あの滝を見せてやれ。山も滝もずっと待ってくれとる。きつとおまえは……」

六郎が言いかける前に浩太が六郎の胸に飛び込んできた。※おえつ鳴咽めいえんが聞こえた。しがみついた手が震ふるえていた。オ、ヤ、カ、タ……。途切れ途切れに声が聞こえた。

⑥ — この子は今日の山登りを何のためにしたのか、初めっからわかっていたのかもしれない。
⑦ — そう思うと泣きじゃくる浩太の背中せなかのふくらみがいとおしく思えた。

※鍛冶職人……金属を打ちきたえて、いろいろな器具をつくる仕事をする人。

※玉鋼……日本刀の刀身の材料にする、砂鉄をとかした鋼鉄。鋼は強い鉄のこと。

※真砂……細かい砂。

※かなやさん……鉄造りの神のこと。

※鳴咽……息をつまらせてはげしく泣くこと。

問一——線部①「説得して」とありますが、説得の内容はどのようなことですか。「〜ということ。」に続く形で本文中より十五字以内で抜き出して答えなさい。

問二——線部②「浩太は自分に裏切られたと思うに違いない。」とありますが、それでは六郎は浩太がどのように考えていると思っているのですか。三十五字以内で答えなさい。

問三——線部③「それは説得とはまったく逆の話」とありますが、どのようなことですか。四十五字以内で具体的に説明しなさい。

問四——線部④「一日一日も砂鉄のようなものだったのかもしれない……。」とありますが、それは六郎の人生がどのような人生だったことを示していますか。本文中の語句を用いて、四十字以内で答えなさい。

問五——線部⑤「六郎は浩太の言葉に口ごもった。」とありますが、なぜ六郎は口ごもったのですか。もつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 浩太の言葉があまりにも常識から外れた特異な発想であったから。

イ 浩太の言葉が身勝手な思いあがりからくる幻想であつたから。

ウ 浩太の言葉が説得の目的にあまりにも一致する内容だったから。

エ 浩太の言葉が説得の目的とは逆の結果を意味していたから。

オ 浩太の言葉が自分への尊敬と感謝の気持ちに満ちていたから。

問六——線部⑥「この子は今日の山登りを何のためにしたのか、初めつからわかつていたのかもしれない。」とありますが、「何のため」だったのが、浩太にとってはっきりと分かった六郎の言葉を、本文中から一文で抜き出して答えなさい。

問七——線部⑦「そう思うと泣きじゃくる浩太の背中のかくらみがいとおしく思えた。」とありますが、このときの六郎の気持ちとしてもつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の希望をあきらめなければならぬつらさや悲しみに泣きじゃくる浩太をかわいそうに思いながら、愛情を感じる気持ち。

イ 自分の志望が親や教師にさまたげられた悔しさに泣きじゃくる浩太に同情を寄せながら、早く立ち直つてほしいと思う気持ち。

ウ 自分の願いをとどまらせる親方の説得力あることばに感動して泣きじゃくる浩太に安心し、かわいらしく感じる気持ち。

エ 自分のこだわりがだれにも理解されないさびしさに泣きじゃくる浩太を気の毒に思いながら、励まそうと思う気持ち。

オ 自分の進路を自分で決められないはがゆさに泣きじゃくる浩太をあわれに思いながら、突き放そうと思ふ気持ち。

問八 この文章は、場面によって大きく二つに分けることができます。後半の場面が始まる一文の最初の五文字を抜き出して答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「雑草」というのは、人間のツゴウで付けた呼び名である。その植物が役に立つか立たぬか、という判断がそこには入っている。沼田先生も、そのことから人間の身勝手さを批判して先のことばを口にされたのだと思う。ところが、その役に立つか否かという判断は、時と場合によって異なる。良い例としてクズを挙げることができる。

クズは日本人にはおなじみのマメ科植物で、つる性の多年草である。日本人はこの根を用いてクズ粉をつくってきた。秋の七草のひとつにも入れられている。近年、このクズが、荒れた土地の緑化にユウコウであるとして日本からアメリカに持ち込まれ、その繁殖をイトしなかった地域で大繁殖してアメリカの多くの地で害草となっている。

我が家の庭には石垣があり、ささやかな家庭サイエンもある。その管理は妻に委ねてあり（ここでも私は怠慢を決め込んでいる）、彼女は「刈っても刈ってもまたすぐに生えてくる」と困った顔をしながら、毎年雑草と格闘している。ある日、その様子を見ながらふと考えた。もし我々が砂漠に住んでいたらどうだろう。どんな植物でも構わないから、たくさん生えてくれることを望むだろう。植物が生えれば、そこには水があり、それを食べる動物がいる。人の命を支えてくれるミナモトがあるのである。

考えてみれば、刈っても刈っても雑草が生えてきて困るということは、そこにはそれだけ高い植物生産力があり、それを支える地力があるということだ。そして、何よりも、そこには多くの生命活動を支える水があるということである。

日本の年間降水量はおよそ一七〇〇ミリであり、世界平均の約一〇〇〇ミリを大きく上回っている。世界でも雨の多い国といえるだろう。その上、温暖でもある。これらの条件が、日本の高い植物生産力を支えている。たくさん降

る雨は、しばしば洪水という災いを日本人にもたらすが、その一方で、大きな恩恵を与えてくれているのである。そう考えると生い茂る雑草に感謝の念を持つようになり、今、日本に暮らしていることの幸運を喜びたい気持ちになってこないだろうか。

そんな雑草を、われわれは除草剤をかけて枯らし、刈り取って燃やしている。その草は、太陽の下で増え、人間に殺されなければ、様々な動物の餌になっていただろう。すると、光合成によって雑草の体内に取り込まれた太陽エネルギーが、食物連鎖を介して多くの生物に運ばれていたに違いない。

例えば、バッタは雑草を食べるが、そのバッタは、次に鳥に食べられるだろう。人間がかわいがっているツバメも昆虫を餌としており、雑草に始まる食物連鎖の上位に位置する動物だ。それだけではない。雑草からの食物連鎖は人間にまでもつながっている。雑草を食べたバッタなどの昆虫には、川や湖に落ちるものがある。この水面に落下した昆虫は、例えばイワナなどの魚の重要な餌になっているのである。そして、そのイワナは釣り上げられ、食卓になることになる。

また、雑草を燃やすということは、雑草が得た太陽エネルギーを熱エネルギーに変え、さらに二酸化炭素を大気中に放出することで、温暖化に貢献してしまう。それならば、刈った雑草を腐らせてから農地の肥料として使い、雑草からバイオエタノールをつくる技術を開発して石油の代替燃料として使った方がいいだろう。もしそれが実現したなら、誰もその植物を雑草などと呼ばなくなるかもしれない。

ところで、二十年ほど前、ドイツのプリヨンという湖沼地帯で開かれたプラントンの国際会議に出席したとき、知り合いのミジンコ研究者に招かれて、彼の自宅を訪れた。彼は、居間でお茶を飲みながら談笑している最中に、窓を大きく開け、「見てください。すばらしいでしょう」といいながら誇らしげに庭を見せてくれた。私はそれを見て

一瞬間言葉を失った。なぜなら、その庭は雑草だらけだったのである。私にはそれがきれいな庭とは思えなかったのだ。そのとき、同行した日本人研究者が笑いながら「我が家の庭と同じです」とジョークを言ったが、相手はその意を解さずきよんとしていた。ドイツ人の彼にとつては、何も手を加えない自然のままの状態がすばらしい景観であるようだ。ということは、日本人が雑草と呼ぶ植物も彼には美しい植物なのである。

このやりとりにより、ドイツ人と日本人の自然に対する考え方の違いを知り、また日本人が偏見の目で植物を見ていることに気づかされたのであった。

その後、その家の主は、庭を掘ってつくった小さな池を指さし、「あの池の中にはミジンコがいるんだよ」と言った。さすが著名なミジンコ学者だ。この言葉で場の雰囲気が一気に和んだのである。

考えてみると、日本人だったら池をつくるとまずそこに魚を入れるだろう。日本人にはそのような固定観念があり、それが考え方の多様性を失わせているように私は感じた。

(花里 孝幸『自然はそんなにヤワじゃない』新潮選書)

※バイオエタノール……サトウキビやトウモロコシなどから作ったエタノール。ガソリンに混ぜて自動車燃料とする。

※ミジンコ……水中の動物プランクトン(浮遊生物、すなわち遊泳能力の低い生物)、筆者はこれらの微小生物群集の變化が魚も含めた湖の生態系全体への影響を研究している。

問一 線部(a) (e) のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 線部①「先のことば」とありますが、この本文の前にある沼田先生のおっしゃったことばとして、もっ

とも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 雑草という名は時と場合によります。

イ 雑草というのは役に立たない植物のことです。

ウ 雑草という名の植物はありません。

エ すべての植物は雑草から進化したものです。

オ すべての植物に名をつけないけません。

問三 線部②「その役に立つか否かという判断は、時と場合によって異なる。」とありますが、役に立つかどうかは時と場合によってどのように異なるのですか。日本とアメリカの場合について、クズの例を挙げ、四十五字以内で答えなさい。

問四 線部③「誰もその植物を雑草などと呼ばなくなるかもしれない。」とありますが、それはなぜですか。三十五字以内で答えなさい。

問五 線部④「ドイツ人と日本人の自然に対する考え方の違い」とありますが、庭についてどのような考え方の違いがわかりますか。本文中の言葉を用いて六十字以内でまとめて答えなさい。

問六 線部⑤「偏見の目」とありますが、これとほぼ同じ内容を示している語句を本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問七

——線部⑥「さすがが著名なミジンコ学者だ。この言葉で場の雰囲気が一気に和んだのである。」とありますが、池にミジンコを入れたことがどうして場の雰囲気を和ませたのですか。次の説明の中でもっとも適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 冗談を言つて学者を傷つけてしまったと思つたが、池のミジンコによってようやく名誉を回復することができたから。

イ 雑草だらけの庭には違和感があつたが、池にミジンコを入れるという思いがけない学者の発想に驚いたから。

ウ 庭の雑草にはとまどいがあつたが、池にミジンコを入れることは学者としては当然であると皆が共感したから。

エ 雑草を庭に植えるなんて学者としての才能に疑問を抱いていたが、池のミジンコによって優秀さを理解できたから。

オ 庭の雑草に対する冗談には無関心だったが、さすがに学者としてミジンコに執着があることが分かつたから。

問八

本文の主張としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 物事を役に立つか立たないかで判断しないで、その実態が本当はどうなっているのかを考えていくべきであらう。

イ 日本人は雑草の繁殖力を嘆くばかりではなく、それをもたらす日本の高い植物生産力に感謝しなければならぬ。

ウ 地球上の生物はすべて個別に存在しているわけではなく、さまざまな食物連鎖の中でしか生きられないのである。

エ 温暖化問題を解決するためには、太陽エネルギーやバイオエタノールなどの利用を急いで普及させなければならぬ。

オ 雑草一つとっても、いろいろなとらえ方ができ、多様な考え方を大切にして自然の豊かさを見つめ直していこう。

キ
リ
ト
リ
線

(注意 字数に制限のあるときは「、」や「。」も一字とします。)

2555

60

40

20

20

40

20